

Title	朝鮮役(参謀本部編, 偕行社發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.1 (1925. 2) ,p.155- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書誌
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0155">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0155</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て前者においては石細工、土器造り、發火術、衣服の進歩を、後者においては歌謠、樂器、舞踏をその象徴として考察してゐる。第四章においては社會の基調をなす婚姻、及びそれに關聯する社會制度、並びに道德、慣習、法律等を考察し、第五章においては人類の社會化の標準である言語を考察してその起原、身振り、談話、信號、文字を述べ、第六章においては宗教の起原に關する層位説と等時説とを検討し、更にアニミズム、神形人視主義、神の觀念、神話と民譚を研究し、第七章結論においては本書全體の内容を概括し、最後に人類文化の將來を論じて終つてゐる。著書も言へるごとく、本書は泰西の學說に著者の創見を加味してなれるものであつて、その構成、或はその細論においては異論もないではなく、また全體としてややくひたらぬ憾みも感ずるけれども、しかしかかる種類の著書の全く缺けたるわが國においては唯一の參考書ともいふべく、これによつて吾々は文化人類學の一般に通ずることも、「人類文化の過去と、その推積であり結果である現在とを知り、更に現在の堆積であり、結果であらうことの未來を知らうとする」ことができるのであつて、つぎに著者の企圖される體質人類學、人類學史、及び應用人類學も早く公刊されて、斯界に貢獻されんことを切望してやまない。(松本芳夫)

## 朝鮮役(參謀本部編 偕行社發行)

本書は日本戰史の一部にして、本編・附記、附表・附圖、文書・補傳の三冊より成つて居る。

本編は第一篇起因及戰役前の形勢、第二篇前役、第三篇講和、第四篇後役、第五篇結果の五篇より成り、各篇は更に章節に分かたれて居る。附記は第一兵制兵器及築城、第二給養兵站及衛生、第三運輸通信及船舶、第四軍紀及風紀、第五區政及賑恤の五に分かれたれ、附表は軍隊の編制等合せて五表、附圖は戰鬪、行動要圖等廿二圖である。文書は本役關係の豊公文書を始め諸家文書を天正十七年三月より慶長四年正月まで年代順序に記載せられてあり、補傳は主として諸將卒の陣中に於ける戰功等を彼我の諸書より拔萃したものである。

朝鮮役は今更改めて云ふ迄も無く、東亞史上の重要な事件にして、これが後世に與へた感化影響は實に大で、これに關する研究書は少くない。就中徳富氏の日本國民史中朝鮮役は權威ある書として認められて居る。此外池内宏博士の文祿慶長の役に未完に屬するも看過し難い良著で、又杉村勇次郎氏の豊太閤朝鮮役も武人たる著者の戰術上よりこれを論じたもので、又一讀の價値があり、更に本役中心人物たる豊公の文書を蒐集したものには日下寛氏の豊公遺文がある。これ等の諸書に續いて、今回參謀本部に於て編纂のこの朝鮮役三冊が公にせられたのである。本編は本書の主要部分であるが其の記述する所甚だ簡略に過ぎるは余輩に意外の感を與へ、まゝ左袒し難い點もある。然し附記、文書、附圖、の三は參考となるどころが多い。序に記して置くが、右の文書中に、本役には誰人も引用する天正十四年四月十日の毛利文書、天正十五年五月廿九日の妙滿寺文書、同年六月朔日の本願寺文書等

は加へてはしかつた。

余輩は淺學なるも本役研究者の一人にして、從來諸學者の顯みなかつた對馬側の史料、殊に余の先年發見した學界未知の本役關係豐公文書等數十に就いて研究し、略々脱稿するので、其内餘暇を得たならば、補訂の上其の一部を發表し、讀者の吐正を仰ぐ積である。

(大正十三、十二、十 武田勝藏)

### 日本民謡の研究 (高野辰之著) (春秋社發行)

曾て俚謡集拾遺等を著はされた高野辰之助氏は、今回「日本民謡の研究」と題する冊子を公にせられた。これは著者の多年補正せられてゐる「日本歌謡史」の抄録であつて、「民謡に基く史的考察」と題すべきものであるが、仰山に見えるといふので、前記の如く題したといふことである。先づ目次を掲げて見る。

- 一、叙説
- 二、民謡記載の乏少
- 三、民謡と國民性の發露
- 四、民謡と世相
- 五、結語

の五章である。其の(一)叙説に於て、民謡の意義より説明して民謡なる熟字は支那六朝頃からあるが、我等が使用するのは恐らく獨逸語の Das Volkslied(國民謡)あたりに導かれて出來た語であらう。從來我國では歌に和歌と俚謡又は俗謡と名けてゐるもの、二種があつて、民謡は全くこの後者と同意義の語であるが、民衆の謡、貴族に對する庶民の謡、野の聲、自然の叫び、郷土藝術といつたやうな近代人の口にする語に近接してゐるので喜んで用ひられたのであらうと思ふ。民謡は叙情詩に屬し、人の心に滲い

た情を單純率直に表現したものが多く、庶民の聲であるだけに極く短篇で眞に新しいものにあつては歌と曲との間に前後がなく、全く同一時に生れ出るものである。短篇であるだけに歌と曲との關係が緊密で、勝手に歌の音數を増減することは許されない。然し其間に多少の伸縮は許されてゐる。民謡は全國各地に就いて調査したら二三の例外は出るであらうが、總じては律語である。民謡は技巧歌と對立する處のものである。又民謡は直に記録せられず口より口へ謠ひ移され、又此所から彼所へは次第に擴がるもので、其歌詞が幾分短縮或は延長せられ、地方化され、時には曲節迄も變化せしめられて、果ては別種のものかと思はせられることもある。内容は多種多様で同様に世相はよく此の上に反映し、其語も亦極めて通俗で卑近に述べるのが普通であるといふ説述せられてゐる。

(二)民謡記載の乏少に於て、民謡は民衆の聲なる爲めに古くは上流貴族社會と交渉あるものでなければ記載せられない。わづかに書紀によつて奈良朝までのもの、萬葉集、雜藝の歌なる今様、神佛の歌等によつて平安朝のものを、閑吟集によつて武家時代のものを窺ふことが出来るのみである。(三)民謡と國民性の發露に於ては我が國民性が民謡の上に如何に表はされて居るかに就いて説明せられ、忠君愛國、祖先崇拜の思想等のあらはれて居ることなどに就いて記されてゐる。

(四)民謡と世相に於て、世相の民謡の上に反映するを説き、假りに局限を附して、之を內的と外的との二方面に分ち、內的に